

### 7.28 原発・エネルギー問題 近畿・福井交流会議の報告④ 討論から

### 広い府民との共同の新しい可能性を示した4つの講演会の成功

—7・18笠井講演会の成功から学んだこと

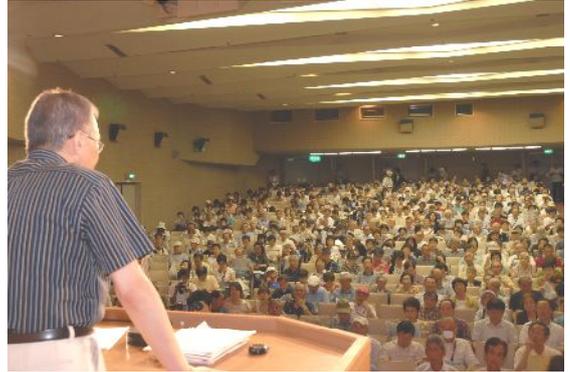
党京都府常任委員・池田文穂

7・18の笠井亮衆院議員の講演会に北部(綾部)380人、京都市内950人(写真)、そして17日の井上哲士参院議員の講演会に2カ所で360人。35万円の募金が集まった。

#### ○講演会の特徴

参加確認の倍近い参加。新しい人の参加の広がりが顕著であった。事前に400団体に案内。ステカンなどで広く呼び掛けた。また大学門前での宣伝などを重視した。

**第一に、抜群の感想がよせられた。**「見事な講演、良い集会でした」「元気が出ました」「回答が明快でわかりやすかった」「原発はいらないことがはっきりわかった」「死の灰の恐ろしさは『はだしのゲン』で知っていたが改めてその恐ろしさを知った」「儲かればいいと言わんばかりに姑息なことを繰り返す大企業は恥を知れ」。北部の感想…綾部の世界救世教の信者の方が、党员の家を訪ね「集会よかった。党派超えた取り組みが必要」と言った。放射能から子どもを守る会の方、自治体職員、大学の教員やゼミの学生、デザイナー、カトリック教会の方など幅広い参加者の参加が。



**第二に、原発を巡る政治的対決の姿が浮き彫りになり、この点への怒りと共感が広がった。**これまでは、「原発のどこが危険か」など原発そのものの学習や疑問がかなり多かったが、「どうしたら原発の危険から逃れられるのか」「だれが原発にしがみついているのか」「本当に脱却できるのか」という政治論としての原発問題、「原発からの撤退」という政治の問題が焦点であることが浮き彫りになった。「シンポ」では飽き足らなくなっている中で、党の政治講演への注目と期待が大きく、「原発ゼロへ講演会 党のゼロ提案をお聞きください」という押し出しがかみ合った。はじめて党の講演会を聞く人を含め、原発を巡る政治対決、党の果たしている役割が違和感なく受け止められ、強く共感されたのが一番の印象。

笠井さんが「赤旗の役割—やらせメール問題」「九州電力の記者会見に赤旗が拒否されたこと」など党の果たしている役割が違和感なく受け止められた。

こうした訴えに対して、はじめて党の演説会に参加したある大学の教授が、「わかりやすくスカッとした内容だった」「たくさんの聴衆で普通の聴衆も多かったことに驚いた」「赤旗日刊紙読ませてもらう」と話した。

**第三に、国民との対話と討論を呼びかける姿を体現する講演会となった。**「原発ゼロ提言」が国民に対して討論を呼びかけていることから、講演会の運営方式も「対話と討論」を重視し、講演と同じぐらいの時間をとって質疑を行ったことが大変良かった。京都市内の会場では31本の質問が寄せられ、50分にわたって丁寧に答え、さらに答えきれなかった点はホームページなどで回答することを約束した。

特に多かったのが「再稼働ができなければ来年春には全原発が止まるから、5年、10年なんて悠長なこと言わなくてもいいのでは」だった。笠井さんは「止めるとやめるは違う」「止めただけでは解決にならない。止めることは大きな第一歩だが、大事なのはやめる政治決断」。これにはかなりうなずく人がいた。

「放射能被曝の線量基準をどう考えたらいいのか」には「低ければ低いほどいいというのが考えの基本」。「自然エネルギーには原発の40倍もの可能性があるというが本当か」など大いに対話となった講演会だった。

#### 原発ゼロへ新しい可能性の広がり…党との共同が新しい規模で進み始めている

○放射能から子どもを守るママパパの会…50人余りの方々が参加、共産党市議などと連絡とりながら、恐る恐る署名に踏み出し、学習を重ねる中で「原発そのものをなくす」ことの必要性に到達し始めている。

○「脱原発」を掲げる人たちが、ホームページで「共産党は『原発撤退』について綱領的位置付けを行った」として7・2志位あいさつを全文紹介。7・18も知らせる。

○「団扇(うちわ)で原発なくす風を起こそう」団扇プロジェクト…2～3人の青年の何とかしたいという思いから発足。ネットで募金と参加を呼びかけると見る見る50万円が集まりデザイナーの協力を得て10万枚の団扇を作成、祇園祭りで配布

○こうした青年や竜谷大学の「E未来構想」の学生が、「原発からの脱却、再生可能エネルギーを考える場を作りたい。大きく発信したい」として龍谷大学に働き掛け、大学の公開講座としても位置付け7・23に講演会を開催。500人が参加。学長の挨拶に続き、朴関西学院大学准教授やアイリーンスミス(グリーンアクション代表)・飯田哲也・エネルギー研究所所長の講演と一問一答、山本太郎氏の発言など熱心な討論が4時間行われた。こうした青年学生がさらに、9・11に大きなパフォーマンスを予定。

○各団体訪問のなかでも、中小企業家同友会など「安全な原発はない」「技術が未完成」という点について「同じ気持ち」「吉井さんには注目している」と意見交換大いに盛り上がる。京都の医師会は、兵庫の医師会の理事長の発言を渡すと、驚いたように食い入るようになって、「共産党さん本当によく頑張っていますね」

○自治体の職員幹部からも…京都市、城陽市、京田辺市、京丹波町などで職員の多くが不破パンフを購入。「原発の危険性がよくわかる」と好評。原発集会に参加する職員も。

## **原発からの撤退の政治決断こそ大事…この点で党の果たすべき役割**

○関西電力の巻き返しを許さず

各自治体の公聴会に参加し、「安全神話」を振りまく(最近では京丹後)。京都府委員会や議員団は5月に関西電力京都支社と交渉を持ったが「老朽化は問題ない。60年は可能」「地震や津波の指摘される事実は認識しているが、信ぴょう性がない」など原発にしがみつく姿をあらわに。さらに、この8月1日「安全対策をやっている」としたチラシをEPZ地域に配布。それに対して、8月2日府会議員団作成で大好評な「わかさ原発の危険ビラ」を全紙に折り込む予定。まさに激しいイデオロギー闘争に。

○自治体が「原発からの脱却、地域分散型・地産地消の再生エネルギーへの転換こそ自治体がめざすべき課題」という点を明確にしていく。議員団の役割大きい。

京都では、「原発からの脱却」意見書が2つ、自然エネルギー活用・安全対策の強化・原子力防災問題などの意見書が10。京都の27自治体が共同で、地震対策の知見を再調査、福島を踏まえた安全対策、規制機関の強化・独立を求める要望書。「原発への依存」「当面は必要」など「撤退」という点では一致していなくても、当面の対策では多くの自治体が一致する状況があり、このことをしっかりやらせる・つきつめていけば「再稼働」「原発推進」とは言えない状況を作り出せる。同時に、世論に押され「縮原発」や「自然エネルギーを考えなくては」と言い、京都府は7月23日「再生可能エネルギー普及戦略会議」を開催。京都市も自然エネルギー政令指定都市協議会を門川市長を代表に発足。そうした動きは重要ではあるが、メンバーに関西電力や京都工業会も入り、結局「脱原発」をあいまいにしたままの再生可能エネルギーを議論する場になりかねず、「脱原発を明確にしてこそ自然エネルギーへの取り組みも本格的なものになる」「原発が土台では他のエネルギーは添え物に」この点を明確にした論戦が必要。

## **一方で、党内の立ち上がりがまだ弱い**

署名は2万。「質問されたら答えられない」、「これが綱領の問題とはなかなか思えない」。向日市の選挙でも「争点にならない」「訴えても票にならない」といった意見が出された。ところが相手(自民・西田参院議員)は相当意識していて「原発から撤退なんて無責任。福島で死んだ人いない、電力不足で熱中症で死ぬ人の方が数100人もいる」と原発を意識し攻撃。市長派議員もいっさい触れない状況で、客観的には「共産党6人実現こそ原発ノーの大きな力」といった論戦が勝利の一要因に。

全党の運動にしていく上で決定的には「集い」が重要。「集い」などでよく討論したところでは、怒りとなり署名目標を決め突破しているところが。京丹後の野間(70%世帯が署名)、伏見の北醍醐(60件に署名を渡したら40軒から署名届けられ、不破パンフが45冊売れた)、署名目標を達成した京田辺市の大住が丘支部や木津川市の加茂支部、伏見の桃山支部のつどいに参加した方が不破パンフを40部購入し知り合いに送る、など支部の意欲を引き出す努力を全支部のものにすれば大きな力がだせる。参加者からの入党者、日刊紙読者拡大とも結びつきつつある。さらに、原発ゼロのたたかいで京都民報が大きな力になっている。原発のことならと京都民報を買い求める動きが。京都民報の原発特集の冊子をつくり販売し活用している。

以上のような問題意識で、原発ゼロの京都府民多数派をダイナミックに作り出し9月10、11日には大規模な原発ゼロ京都行動・大集会を幅広い団体とも共同して成功させたい。若い人の共同した取り組みを特別重視したい。

**原発交流会議の報告は今回で終わります。ニュースへの情報提供をお願いします。地方議員のメール登録もよろしく**